



走れ  
北信越の大地を  
とへ  
北信越の大空へ

## 輝け君の汗と涙 北信越総体 2021

### 大会レポート

全国高等学校体育連盟テニス専門部

常任委員 佐藤 直樹

#### 《 コロナ禍の中の開催 》

昨年滋賀県で行われる予定だったインターハイは、新型コロナウィルス感染拡大の影響で中止という判断となり、高校生活の集大成と考えていた3年生にとっては活躍の場が突如失われる残念な事態となってしまった。1年経った今も、コロナウィルスの蔓延は収まっていないが、検査の拡充やワクチンの接種など世の中は確実に前へと進んでいる。そのような中で2年ぶりに開催することになった今回の北信越総体では、今年3月の選抜大会同様、各選手や監督、大会関係者に感染防止対策の徹底をお願いした。この夏、日本全体は東京オリンピックのメダルラッシュで盛り上がっていたが、本大会も負けないぐらい白熱した戦いを繰り広げていた。



#### 《 団体戦 》 8月2日（月）～4日（水）

初日は団体戦の1、2回戦が行われた。男子の初戦はストレートで勝ち上がる試合が多かったが、女子は実力が拮抗していたようで初戦から3対戦目までもつれる試合が多かった。尚、男女ともダブルスを制した学校のほうが試合を優位に展開していたようである。また、女子第4シードの仁愛女子（福井）が東京学館船橋（千葉）に接戦の末敗れ、初戦で姿を消した。

二日目は準々決勝まで行われた。男子の3回戦で第1シードの相生学院（兵庫）がノーシードの湘南工大附（神奈川）に敗れるなど波乱もあり、ベスト8には湘南工大附、北陸（福





井)、新田(愛媛)、東京学館浦安(神奈川)、四日市工(三重)、柳川(福岡)、名経大市邨(愛知)、関西(岡山)が勝ち残った。さらに準々決勝では、北陸、東京学館浦安、四日市工、関西の4校が勝利を収めた。四日市工と戦いDとS1がどちらもタイブレークまでもつれた柳川は、あと一步のところでベスト4入りを逃した。

女子のベスト8は四日市商(三重)、静岡市立(静岡)、沖縄尚学(沖縄)、第一薬科大付(福岡)、松商学園(長野)、相生学院(兵庫)、浦和麗明(埼玉)、岡山学芸館(岡山)が勝ち残り、準々決勝では四日市商、第一薬科大付、松商学園、岡山学芸館が勝ち残った。沖縄尚学はS1が粘って勝ち切ったものの、他を取れず準決勝に残ることはできなかった。

三日目は準決勝と決勝が行われた。今大会では最終セットが10ポイントタイブレーク制の3セットマッチで行われた。男子の準決勝、北陸-東京学館浦安は、Dで東京学館浦安が2セットを連取し1ポイント。S2で北陸が先に1セット目を取ったものの、2セット目は東京学館浦安が奪取。最終セットは北陸が取り返し、同点。残るS1は東京学館浦安が2セットを連取し、勝利を収めた。

四日市工-関西は、四日市工がD・S1・S2すべて1セットをとる有利な展開。しかし、D・S2で関西が2セットをとり、最終セットへ。S2は2セットの勢いのまま関西がとり、Dは四日市工がとったため同点。ここで四日市工S1が2セット目もとったため、四日市工が2-1で勝利した。



-四日市工。Dは東京学館浦安コンビネーションで2セットから調子を上げてきたで攻めるものの、1セット目制した四日市工の眞田が2



決勝戦は東京学館浦安の橋本・金田が見事なトを連取。S1は、関東代島が得意のストロークのタイブレークを何とかセット目も取りきり勝利。

S 2 は 2 セット目に東京学館浦安の加藤が粘りを見せても、四日市工の堤がストレートで勝ち切った。2-1 で四日市工が優勝を果たした。インターハイで初めて決勝進出を果たした東京学館浦安は、初優勝とはならなかった。



女子の準決勝、四日市商第一薬科大付が 1 セット市商が取り返す。反対に S 2 セットを第一薬科大付にもつれこんだ。D は両



第一薬科大付は、S 2 でをとるも、2 セットは四日 1 は 1 セットを四日市商、がとり、どちらも最終セッタ者互角の戦いで、1 セット



はタイブレーク、2 セットも 1 2 ゲーム目までもつれ込む熾烈な争いを繰り広げていたが、S 1・S 2 の最終セットを第一薬科大付が両方とも勝ち切り、2-0 で勝利を収めた。



#### 松商学園－岡山学芸館

は、岡山学芸館がまず D・S 1・S 2 すべて 1 セットをとり、S 1 は 2 セットもしっかり勝ち切り 1 ポイント。しかし、S 2 で松商学園が 2 セットを取り返し、最終セットへ。D も両校どちらもゆづらぬ展開で、たった 1 球で流れが変わってしまいそうなこの場面。岡山学芸館の S 2 が最終セットをなんとか凌いで勝利し、2-0 で決勝に進んだ。



決勝戦は第一薬科大付－岡山学芸館。S 1 は岡山学芸館の吉本が 1 セットをストレートでとり、その勢いのまま 2 セットを取り切り勝利。S 2 は第一薬科大付の小林が 6-1、6-3 のストレートで勝利した。D は 1 セット目のタイブレークを勝ち切った岡山学芸館の同前・原田が 2 セット目もとり勝利し、2-1 で岡山学芸館が勝利した。岡山





学芸館は春の選抜大会で決勝に進むも惜しくも準優勝で悔し涙を流したが、「みんなで日本一をとる」ことを目標にチーム一丸となって練習に励み、本大会で見事に雪辱を果たした。



《 個人戦 》 8月5日（木）～8日（日）

本大会では、男女シングルス、ダブルスとともに2回戦まで1セットマッチ、準決勝まで8ゲームプロセットマッチ、決勝は10ポイントタイブレークの3セットマッチで行われた。

初日は男子のシングルスと女子のダブルス、二日目は女子のシングルスと男子のダブルスが行われた。初日の途中、雷の影響で午後2時半から一時試合が中断される事態となつた。男子は雷が止んだのちに再開されたが、女子はドームへと会場を移動することとなつた。

結果、男子シングルスのベスト8は田中佑（湘南工大附）、丹下颯希（新田）、野坂迅（秋田商）、石川真樹（東海大菅生）、眞田将吾（四日市工）、高妻蘭丸（大分舞鶴）、小泉熙毅（浦和麗明）、高悠亜（関西）。男子ダブルスのベスト4は菅谷・有本（慶應義塾）、石川・山田（東海大菅生）、小泉・須田（浦和麗明）、今里・鳥井（長崎海星）。女子シングルスの

ベスト8は平田葵（白鵬女子）、伊藤あおい（代々木）、吉本菜月（岡山学芸館）、宮原千佳（第一薬科大付）、山口花音（浪速）、櫻田しづか（静岡市立）、丸山愛以（四日市商）、中島



玲亜（岡山学芸館）。女子ダブルスのベスト4は内島・西（白鵬女子）、櫻田・稻葉（静岡市立）、川口・繁益（京都外大西）、金子・中川（浦和麗明）。

三日目はシングルス、ダブルスとともに準決勝まで行われた。男子シングルスでは、第1シードの田中佑（湘南工大附）が丹下颯希（新田）と石川真樹（東海大菅生）を破り決勝へ。また、第2シードの高悠亜（関西）と高妻蘭丸（大分舞鶴）を破った小泉熙毅（浦和麗明）が決勝進出を果たした。男子ダブルスは菅谷・有本（慶應義塾）と小泉・須田（浦和麗明）が決勝へと勝ち上がった。シングルス、ダブルスともに関東勢同士の決勝となり、小泉（浦和麗明）はどちらも決勝に駒を進めた。

女子シングルス準決勝、伊藤あおい（代々木）が平田葵（白鵬女子）と吉本菜月（岡山学芸館）に勝利し決勝へ。また、中島玲亜（岡山学芸館）と櫻田しづか（静岡市立）を破った丸山愛以（四日市商）が決勝へ進んだ。丸山はこれまで櫻田に勝てていなかったため非常にうれしいと語っていた。女子ダブルスは内島・西（白鵬女子）と金子・中川（浦和麗明）

がそれぞれ勝利した。



なかなか自分の思う通りに調子を上げ、得意のめで2セット目をゲットは小泉がとり、2遂げた。



りのプレイができずにいたが、次第ストロークをしっかりとコートに沈ト。そのままの勢いでファイナルセー1で小泉が田中に勝利。初優勝を

男子ダブルスは菅



谷・有本（慶應義塾）と小泉・須田（浦和麗明）の対戦。関東大会優勝者の小泉・須田に対し、「挑戦者のつもりでリラックスして試合に臨むことができた」と語った菅谷・有本。安定感のあるストロークと積極的なネットプレイを武器に、ストレートで勝利し優勝。小泉は個人戦二冠とはならなかった。





女子シングルスは伊藤あおい（代々木）と丸山愛以（四日市商）の対戦。優勝を狙っていたという伊藤は焦りから守りに入ってしまい、いつものプレイが出せずにいた。対して、個人戦シングルスで全国大会出場は今回が初めてという丸山は、しっかり走って打つという自分のプレイスタイルを信じ積極的にストロークを打っていった。そんな丸山が2セットを連取し、全国大会初出場にして初優勝を果たした。

女子ダブルスは内島・西（白鵬女子）と金子・中川（浦和麗明）が対決。最初はお互いに緊張がみられたが、その中で強気に攻めていった内島・西が1セットをとる。2セットはお互いどちらも譲らぬ展開。タイブレークでは内島・西が一時リードしたものの、金子・中川が底力を見せ2セット目をもぎ取る。ファイナルセットもシーソーゲームとなるが、内島・西が一歩リードし9-6でマッチポイント。金子・中川も負けじとここから2ポイント連取するが、最後は内島・西にポイントが入り、2-1で勝利した。



### 《 終わりに 》

コロナ禍での開催にあたり、長野県実行委員会並びに長野県テニス専門部及び生徒補助員の方々には通常大会開催では考えのつかないほど時間をかけて開催していただき感謝申し上げます。また、大会期間中の感染者が発生しなかったことに対しても大会関係者が対策対応をしっかりと行っていたと思われた。今回はインハイ初の無観客での開催で試合前の会場は例年に比べてやや寂しい雰囲気があった。しかしざ試合が始まると、打球音や足音、選手たちの息遣いまでもがコートの外まで伝わってきて、緊迫感に満ち溢れていた。また、ポイントごとに選手の声が響き渡り、テニスへの情熱や仲間への想いがひしひしと伝わってきた。さらに、そ



の選手のプレイに応えるように、補助員 S C U が自分の仕事に丁寧に取組み、アナウンスの声ものびやかに響いていた。

団体戦決勝戦の S C U を担当した高校 2 年生の補助員に話を聞くことができた。試合の感想を聞いたところ、ハイレベルな戦いを目の前で見ることができたことに感激しており、来年は選手としてインターハイの舞台に立ちたいと決意を新たにしていた。補助員の仕事に真摯に向向き合っていた彼女であれば、今後練習を積み重ねることで夢を実現することも可能であろう。

今後の展望はいまだ不透明である。本大会では、緊急事態宣言等でなかなか満足に練習をすることができていないと、苦しい状況を語る選手も多く見られた。次年度、高知県で開催されるインターハイが、選手にとってより良いコンディションで、より良い環境で臨めるような大会になることを祈念して、本レポートを終了する。



